

霊峰・富士登山の旅 -後編-

七合目から本八合目へ (標準で 2:30)

はたごまち
まるで天空の旅籠街!?!..

山小屋のテラスで「御来光」の瞬間を待ち望んだ多くの登山者達も落胆したが、すぐ次の行動のために散って行った。Am5:15。山頂には登らないという「ワガツマ」に見送られていきなり急な岩場から登り始めた。これから 14 の山小屋のうち残る 11 の山小屋を巡った後に山頂に達することになる。



益々深まる濃霧の中を登る..

4 番目の「鎌岩館」は「七合目トモ工館」のすぐ上にある。裾野が真夏の太陽に暖められる程、下界から濃霧が湧上がってきて登山道は薄暗く感じられた。その「鎌岩館」に到着した。



山小屋の軒先には電灯がとり、登山道を照らしている。その電灯の「明かり」に温もりを感じつつ、更なる高嶺を目指して登る。山小屋はガッチリした尾根筋にあるため、その間は岩場の登りとなった。「富士一館」を通り過ぎて天空を見上げると、白銀の濃霧の中から真っ赤な鳥居が現れた。「鳥居荘」である。

このまま濃霧が晴れないのでは !?... 「鳥居荘」から7番目の山小屋「東洋館」への岩場を登る。深まる濃霧が行く手を覆い隠す。足元を見つめ、次に登山靴を踏み出す場所を目で拾いながらの登行を続ける。**心の片隅に「このまま濃霧が晴れないのでは・・・」との想いがよぎる。**周囲の景色はまるで望めない。持参した「高度計」だけが励みとなった。一步一步、足を踏み出す毎に、**山頂の「3776 標」への標高差が確実に縮まっているのは事実であり、現実である。**



「鳥居荘」の裏手から岩場を登る・・・



濃霧の中から7番目の山小屋「東洋館」出沒!!



標高 3100m突破!!
八合目 8番目の「太子館」



9番目の「蓬莱館」でひと休み・・・



「蓬莱館」前も深い濃霧が・・・



10番目の山小屋「白雲荘」
案内板は山頂まで 2.0km、140分と告知・・・

突然、濃霧に異変が... 「白雲荘」には Am7:00 に着いた。高度計は 3120m。山小屋の前の温度計は 4.5 を示していた。ここから 11 番目の山小屋「元祖室」に向かう途中、**山肌を覆う濃霧に決定的な異変が起きる**事になるが、深い濃霧の中に佇む私達は**まだ知る由もなかった。**

「雲の上のひと…」になる !?… 「白雲荘」を出発して間もなくの事である。今まで富士の山腹を覆っていた濃霧が忙しく動き始めた。その濃霧の綻びが、真夏の太陽の光で一際白く輝く。「オヤッ」と思いつつ登ると、天空に青い空が見えた。薄れた濃霧は山肌を伝って麓へと下りていく。私達は濃霧が晴れた、とその時は思ったが、実は「雲の上」に飛び出たのである。



天空の扉が開いて・・・
頭を雲の上に出した、富士の山が・・・



私達も「雲の上のひと」になる・・・

北岳(3193m)の標高を超える・・・

ここでの標高は 3250m である。国内第 2 の高峰である北岳の標高 (3193m) を超えた。「富士山山頂以外、ここより高い山は日本にはない!!」という地点に、私達は立つこととなったのである。

今まで濃霧の中を登ってきたが、雲の上に出て天空を見上げると、何処までも透き通った青空が広がっている。その青空に山小屋や山頂が貼り付いて、手に取れるような至近距離に見て取れた。

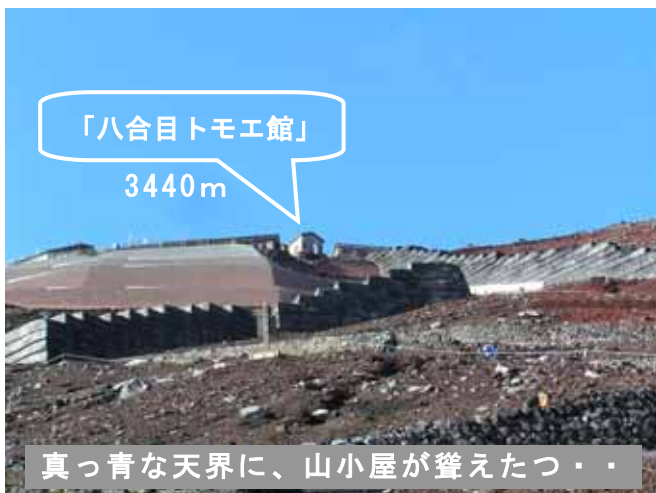
振り返り、登ってきた眼下の登山道を見下ろすと、踏破してきた先に「六合目」や「五合目」の登山基地へ延びる登山道が確認できる。その先には富士吉田市を覆い隠す雲海が浮かんでいる。

残る山小屋は「あと、3つ」。それを通り過ぎれば、富士山頂との「ご対面」となる筈である。

11 番目の「元祖室」には Am7:25 に着いた。



「元祖室」前の指導標・・・海拔 1 万 807 尺??



「八合目トモエ館」

3440m

真っ青な天界に、山小屋が聳えたつ・・・



六合目

2390m

登ってきた「登山路」が眼下に広がる・・・

本八合目～山頂へ (標準で 1:20)

赤富士の、正体を見たり!?…

12 番目の山小屋「富士山ホテル」(3400m)には Am7:50 に辿り着いた。気温 4.0 。太陽の高度も上昇し、富士の山肌に真夏の太陽光が降り注ぐ。今まであまり気に留めていなかったが、なるほど「赤富士」である。江戸時代後期の浮世絵師葛飾北斎の作品に、有名な「富嶽三十六景 凱風快晴」(通称:赤富士)がある。今までは、なぜ富士山は「赤い」のだろう、としか思っていなかった。がア、現実^{がぜん}に今、その「赤い山肌」と対面し、その光景には納得した。「なぜ赤い!?’のか。それは、鉄分を多量に含んだ溶岩が急激に凝固し、長い年月を経て「酸化して赤く錆びた」と言った方が解りやすい。それが「赤富士の正体」であった。



「赤い山肌」の中を「ゆっくり」歩む・・・



最後の山小屋と山頂を仰ぎみる・・・

富士山頂デビュー・・・

13 番目の山小屋「八合目トモエ館」に Am8:10 着。そして吉田ルート最後の山小屋「御来光館」と山頂を仰ぎ見る。その先には私達、憧れの場所がある。

「御来光館」には Am8:25 に到着した。案内板は山頂まで 900m、60 分と告げている。

一番心配していた天候だが、まさに「無二の日本晴れ」である。初体験の「富士山デビュー」にして、最高の舞台との遭遇が今、実現する。



最後の山小屋「御来光館」です・・・



荷揚げ用のブルドーザ道が下山道である。

左手には下山専用道が見える・・・



眼下から、次々と登山者が湧上がる・・・

天が味方した、日本一の山登り・・・

「御来光館」前で 20 分程休憩して、山頂に続くツツラ坂をまた登り始めた。手前と山頂部には白い鳥居が確認できる。ここまで来れば、富士山山頂に立つのは、もう時間の問題である。

「御来光館」を過ぎてからの登山道は砂礫されきの比較的広い道が続いたが、しだいにゴツゴツとした道に変化した。しかし、さほど気にする事なく、淡々と山頂を目指して登る。天候と時間に何の不安もない。まさに日本一の山登りである。



白い鳥居は存在感がある、山頂近し・・・



「九合目」、標高 3600m まで来たゾォ・・・



「山頂まで 200m」、それを励みにした・・・

アクシデント発生 !?・・・

「九合目」の案内板に Am9:10 到着。その案内板には「富士山頂 → 200m」と書いてある。富士登山の長い道のりが、あと 200m で終着点となる。慌てる事は微塵もない。絶景の風景と同化しながら、短い歩幅で一步一步、その山頂を目指して前進して行く。

やがて山頂付近の白い鳥居が、視界の中にハッキリと捉えられる位置になった。その鳥居の前には一対の狛犬こまいぬ ちんざが鎮座ちんざしていて、山頂に入る者を山の厳しさ以上の鋭い眼光を持って出迎えている。背後の白い鳥居を通過すれば、私達は晴れて「夢の実現」であった富士山山頂に立つ事なのだ。

興奮を涼しい顔すずをして鎮めしずながら、頂上目の前の狛犬の間に 3 人が並んだ証拠写真を撮る。もう 1 枚アップでと思いシャッターを押すが、作動しない!?. な、なんと、カメラのバッテリー切れである。



山頂の鳥居が間近に迫る・・・



背後の鳥居をくぐると富士山頂なのだ・・・

富士山(吉田ルート)登頂！！

ついに、富士山頂に立つ…

山頂直下の^{こまいぬ}狛犬を過ぎて階段をのぼり、久須志神社の白い鳥居を^{くぐ}潜り抜けて富士山頂に到達した。Am9:45。宿泊地「七合目トモエ館」を出発し、実に4時間30分かけての登頂である。お互いに握手を交わし健闘を^{たた}讃え合った。そして山頂から眺める360°の絶景と^{そうつ}遭遇する事となる。

問題のカメラですが、実は予備のカメラも持参していた。しかし、メモリーの容量が少ないのでチョット心配。果たして何処まで持つか要注意？。

山頂には「久須志神社」が^{まつ}祀られ、その隣には「山口屋支店」「扇屋」「東京屋」そして「山口屋本店」の四つの売店(山小屋)が並んでいる。

「富士山頂上^{せんげん}浅間大社奥宮」の「碑」は山頂を^{きわ}極めた^{あかし}証に、写真撮影する人気スポットらしく、長い順番待ちの状態になっていた。登ってきた眼下の雲海は消え、富士吉田や河口湖が望める。



吉田ルートの富士山頂・・・



久須志神社 (富士山本宮浅間神社の末社)

混雑のため
お鉢巡りに後撮影



登頂記念にと、
写真撮影の
人気スポットです



山頂からは富士吉田市街が丸見え・・・

千載一遇のチャンス！！…

事前の登山計画では、よもや今回のような好天に巡り会えることは、あり得ないだろう。最悪の場合、山頂への登頂は断念する事もあり得るヨ、と話していた。

晴天で、且つ無風状態が嬉しかった。富士山に登頂し、「お鉢巡り」もできる。まさに千載一遇の^{せんざいいちぐう}チャンスである！！。



成就岳

「御来光」の客が過ぎ去った売店小屋の前庭？

富士山頂の風景・・・

山頂の中央には「大内院」と呼ばれている噴火口があり、外輪からの落差は約 230mもある。「噴火口跡」とは云うものの、富士山は現在でも「活火山」としての分類に入る。

富士山頂の外輪は一周約 3 kmの登山道がある。この山頂の周回路は「お鉢巡り」と呼ばれ、日本最高峰からの絶景が堪能できる。

また、外輪には最高峰の剣ヶ峰（3776m）を主峰として、白山岳（3756m）、久須志岳（3720m）、成就岳（3734m）、伊豆岳（3749m）、朝日岳（3730m）、駒ヶ岳（3718m）、三島岳（3734m）と云った 3700m級の八つの峰がある。これらの峰は総称して「八神峰」（別名：富士八峰）と呼ばれている。（山名は諸説あり）



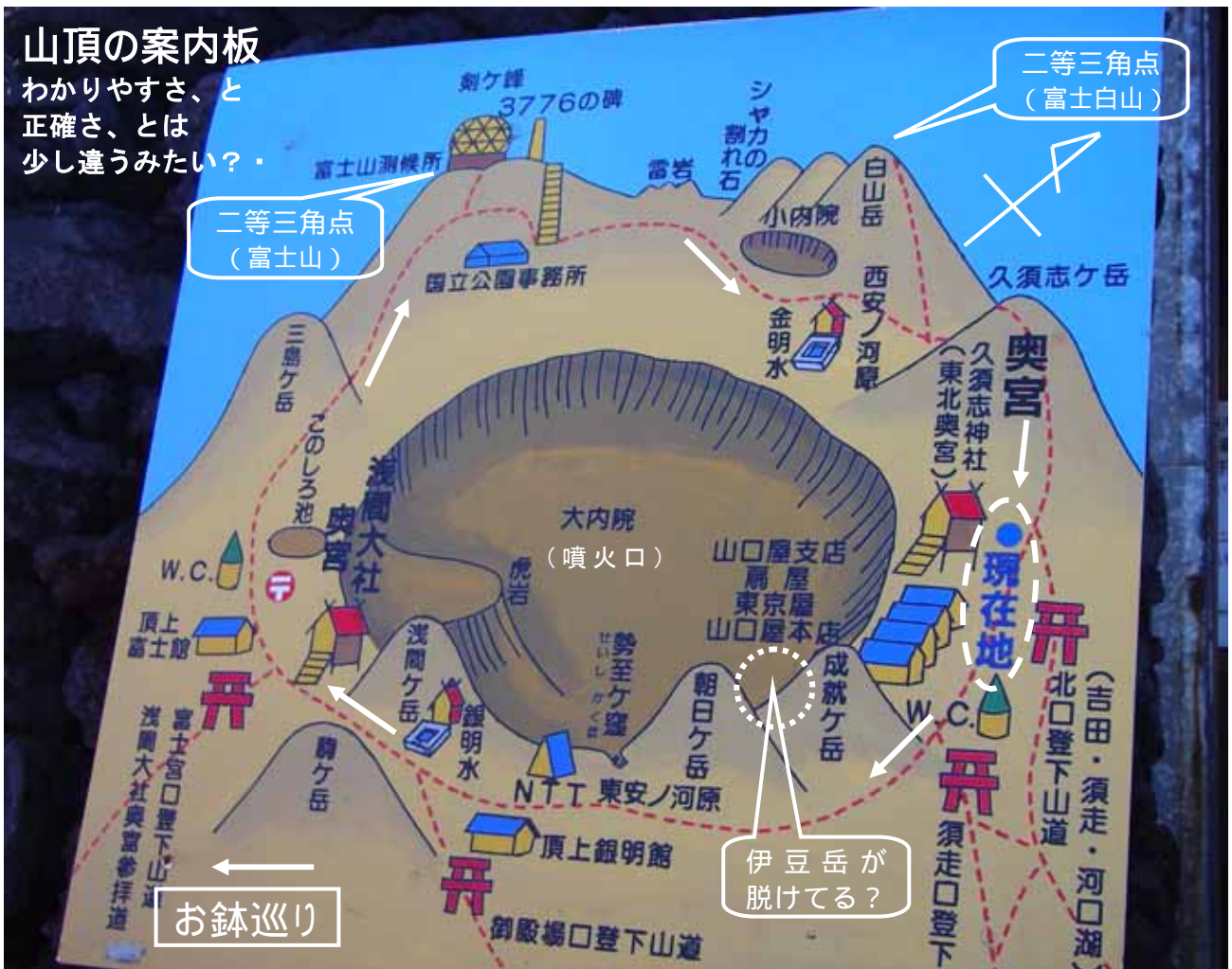
成就岳から眺めた「吉田ルート」山頂の様子・・・

富士山に、一等三角点はない・・・

富士山頂に「一等三角点」はなく、剣ヶ峰（三角点名：富士山）と白山岳（三角点名：富士白山）に二等三角点がある。三角点の「点の記」によると、2つとも大正 15 年に設置されており、現存する三角点の柱石は、昭和 37 年（富士山）と昭和 39 年（富士白山）に更新されたものである。

山頂の案内板

わかりやすさ、と正確さ、とは少し違うみたい？



天空の遊歩道 (標準で 1:35)

好天に誘惑され、お鉢巡りへ!^{はちめぐ}

しばし休憩し、Am10:10に「お鉢巡り」に出発する。天候によっては、山頂に行けない事もあり得る。そう覚悟をしてきただけに、**高山にして無風状態の快晴は、運を使い果たしても手にする事の出来ない、気象条件である。**体調も時折、軽い頭痛を自覚する「高山病」の症状が出ているが、それ以上には進行していない。

山頂の4軒の売店の前を通り過ぎ、下山道となっているブルドーザ道分岐から、右側の登山道に入った。「お鉢巡り」のルートである。

天空の遊歩道を 闊歩する・・

「お鉢巡り」の登山道は、3700m級の八つの峰を巡るもので、山頂までのツヅラ坂を登り続けた山行とは一変する。まさに「天空の遊歩道」である。腰を^{かが}屈める必要もなく胸を張り大股の歩幅でその「天空の遊歩道」を^{かっぽ}闊歩する。



ツアー客と登山者・・ 「天空の遊歩道」を歩き出して、ある異変に気づいた。まず目に付いたのは登山者の少ないことである。富士登山ツアー客のほとんどが「山頂での御来光」を見ることが目的らしく、団体行動故に「お鉢巡り」には足が向かないようである。もうひとつの異変は、山頂までのツヅラ坂ではなかった「山の挨拶」が交わされることである。例え見ず知らずの人でも、「こんにちは!!」と交わす言葉は、同じ登山者としての親しみが湧いてくる。更に行き先の状況を尋ねれば、会話も弾むことになる。「一期一会」の出会いであるが、それも山での楽しみ方である。会話の無かったあの時の「団体ツアー客(観光客)」と登山者とは、少し違うように感じた。

西側は崖崩れの山 !? .. 山梨県

側の登山道は吉田・河口湖口と須走口のコースが本八合目で合流し、ひとつになって山頂に至る。

静岡県側の登山道は御殿場口と富士宮口のふたつある。しかし**双方が独自のルートで登り、60m程しか離れていない山頂部に到達する。**

富士山頂は、到達する登山道、そして神社、山小屋などはすべてが東側にある、西側の山頂部にはそれらの類は何もない。西側は「大沢崩れ」等に代表されるように「**崖崩れの山**」のようだ。



御殿場口は快適な下山道?? ..

起伏のない「遊歩道」を快適に歩く。絶景を満喫しながら、御殿場口山頂部に Am10:50 に着いた。御殿場口の特徴は下山道の「砂はしり」で、**一步 3m 余りで下れる**ようである。箱根山や駿河湾を見下ろしながらの下山は、他の下山道では味わえない醍醐味を堪能できる。かなりの急坂なのか?、案内板にそんな記載があった。



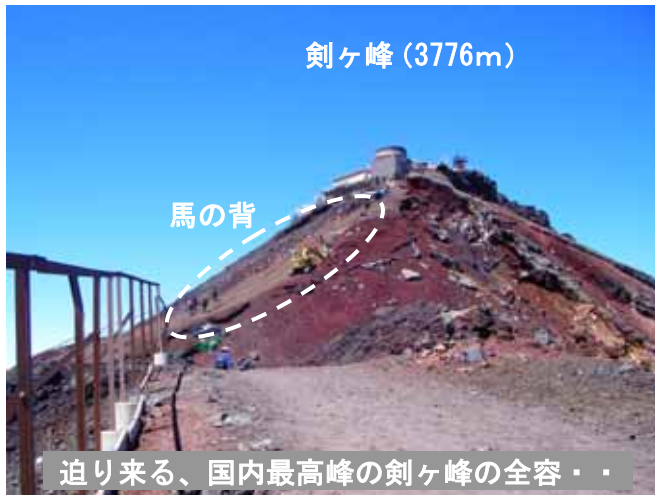
山頂の建設現場に、なんでエ !? ..

御殿場口から富士宮口の山頂に移動する時に、雲の間に海が見えた。「駿河湾」である。「**世界文化遺産**」登録時に話題となった「**三保の松原**」の海である。深呼吸をしてその絶景と対峙した。

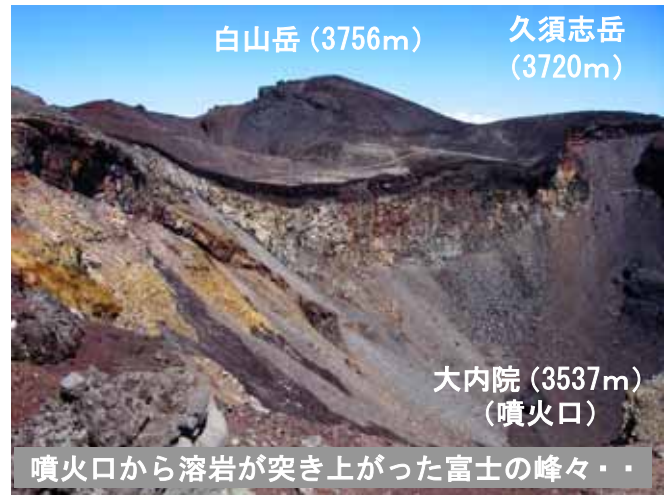
富士宮口に到着した。そこでは神社周辺の建設工事の為、大型重機が忙しく動いていた。「**富士山頂に大型重機?**」一瞬、目を丸くして驚いた。



日本最高峰、剣ヶ峰へ!!... 富士宮口の「浅間神社奥宮」に到着した。神社前の「夏期限定郵便局」はもう閉鎖されていた。その前にある木製のテーブルと椅子を借用して軽食をとる。富士宮口から最高峰の剣ヶ峰までは標準タイムで 20 分の距離である。神社正面から左手のコースに進む。やがて、右手に噴火口「大内院」が大きく口を開け、目の前には剣ヶ峰の全容が迫り来る。



迫り来る、国内最高峰の剣ヶ峰の全容・・・



噴火口から溶岩が突き上がった富士の峰々・・・

馬の背から、最高峰に到達です。!!

山頂への最後の登りは「馬の背」と云われる悪路になっている。岩盤の上を砂礫が覆い、かなり滑りやすい。慎重に登るも、「ズルッ、」と後退すること数回繰り返して、ついに国内最高峰「剣ヶ峰」の山頂に登頂した。時刻は Am11:40 である。



この「馬の背」の悪路が最後の登山路だ・・・

この子たち、凄いんだねエ...

山頂は多くの登山者がいて日本最高峰の碑で写真撮影をしていた。私達の順番が来た。その最高峰の碑を尻目に二等三角点「富士山」を囲んで写真を撮っていたら、近くにいた女性の方が「それは、何ですか？」と尋ねて来た。それに応えて、三角点と電子基準点の説明をした。特に電子基準点は地殻変動を常時観測していると話すと、その女性の方が「へー、この子たち、凄いんだねエ!？」と感嘆の声を上げた。それが合図となり、他の登山者もその「三角点」を主役に写真撮影を始めた。



日本最高峰の碑と二等三角点「富士山」・・・



最高峰からの絶景を写真撮影する・・・

お湯は何度で沸騰するのか !? ..

最高峰の剣ヶ峰 (3775.63m) 山頂では果たして「お湯は何度で沸騰するのか!?’非常に興味があった。その好奇心を満足させるため、ダイスケには携帯コンロと「カップラーメン」の持参をお願いしていた。

山頂での気圧は 637hPa、気温は 9.0℃である。気圧は平地の一気圧 (1013hPa) に対して 62.9% である。富士山頂での空気薄さは平地の 2/3 (66.7%) と、聞いていたが、それ以下である。

コッヘルの水から湯気が上がり沸騰してきた。透かさず「棒状温度計」をその中に入れた。目盛りは勢いよく上昇したが、80℃を過ぎると鈍くなった。しばらく見守ったが、84℃で動かなくなった。そのお湯で「カップラーメン」を作り食べ始めた。気になるのは、その「味」である。『ぬるい!!、んでも、^く食わ^んね^エ事^はね^エー。』と、日本一の絶景を眺めながら、^{また}瞬^たく間に完食していた。



作家新田次郎と「富士山頂」・・・

山頂には巨大なドーム形の建造物がある。現在は「富士山特別地域気象観測所」となっているが、かつては「富士山レーダー」として活躍した施設である。これは作家新田次郎 (本名藤原寛人) と特別な深い繋がりがある。1959年の「伊勢湾台風」の甚大な被害を教訓に、^{つな}広^い範囲^いの^い雨^い雲^{ふう}を探知できる気象レーダーを日本一高い山「富士山」に建設する事になった。当時気象庁の担当課長であった「新田次郎」こと藤原寛人がその建設の陣頭指揮を執り、1964年9月に完成させた。「富士山レーダー」の探知距離は 800 km (平坦地の3倍)、風速 100mにも耐え、1999年11月1日に「気象衛星」代わるまでの 35年間、「日本を守る台風の^{とりで}砦」の役割を果たした。「富士山レーダー」の完成をした後に「新田次郎」は気象庁を依願退職し執筆に専念した。小説『富士山頂』は、このときの藤原寛人課長の体験をモデルにして書かれた。



登山の醍醐味を共有 !!

下山前、剣ヶ峰山頂からの風景をひとつも残さないよう、じっくりと眺める。

神々しい赤い岩肌の峰々、その岩が削ぎ落された深淵な「大内院」の噴火口、そして背後に広がる青い空と白い雲。

まるで登山の醍醐味が凝縮されたような、二度と再会出来ない、そんな時間と空間を、私達は共有する事が出来た。

20分間滞在した山頂を Am12:00 に出発し、「久須志神社」に向かった。



剣ヶ峰山頂からの風景

お鉢巡りの終着、久須志神社

山頂からの「馬の背」は、路肩の砂礫の多い場所を選んで下降する。それでも「ズルツ、」と滑ったりしてしまう。そこを通過した後は、緩やかな起伏の道を、久須志神社に向かって歩く。行く手の赤い岩肌の先に白山岳が迫る。後を振り返ると剣ヶ峰が遠くに後退し、その噴火口側の北斜面には「万年雪？」が確認できる。

そして30分後、吉田ルート山頂「久須志神社」に Am12:30 に戻った。出発してから2時間20分。(標準 1:35) 大満足の「お鉢巡り」であった。



赤い山肌を進む先に、白山岳が迫る



空気は薄い、ハイキング気分!?



振り返ると、剣ヶ峰の北側に万年雪がある

お鉢巡りの余韻に浸る

山頂の登山者数は激減していた。「お鉢巡り」の充実感と安堵感に包まれ、その余韻に浸った。がア、突如、いい匂いを感じた。目の前に食堂があったのである。急に「空腹」を感じて全員が一杯900円の「みそラーメン」を注文し、食した。



ラーメンの匂いに誘われて

山頂から連泊の宿へ(標準で 1:35)

「懐かしい？」吉田口の山頂 !? ..

いよいよ富士山頂を離れる時が来た。「お鉢巡り」を終え、再び吉田ルート^{かか}の山頂の風景に接すると、変に「懐かしく」も想えた。たった3時間前、この山頂に登頂したばかり。にも拘わらず愛着を覚えるのが不思議?。その登山道を見下ろすと、引きも切らない登山者の列が確認できる。

ブル道兼下山道を下る ..

Pm1:10 に下山を開始する。「お鉢巡り」の分岐点から、今度は下山道にもなっている「ブルドーザ道」に進んでいった。

ブル道兼下山道は砂礫の道で、その急勾配に背中を押され、大股の歩幅で「グングン」と下る。その分砂埃^{すなぼこり}が凄^{すご}い。前の人と相当な距離をおいて下る。本八合目でブル道から登山道に入る。連泊の「七合目トモエ館」に Pm4:00 前までに到着したかった。山頂でたっぷり時間を使い過ぎたようだ。しかしその価値はあまりにも大きい。



無事に連泊の宿に到着する ..

吉田ルート^{かか}の下山道は「ブル道」が専用となっている。がア、本八合目からは、午前中に登った道を下る。「鳥居荘」に着いたら登りの登山者の数がもの凄^{すご}い。目的地まであと3つの山小屋がある。登山者の列の切れ目を狙^{ねら}っての下山をする。Pm3:45。連泊の宿に無事到着した。



「やまがある」からの祝福 !?

山小屋の中に荷物を降ろし、「ホッ」とする間もなく、携帯電話に着信があった。

「富士山登頂おめでとうございます。今日はねエ、私のいる川崎から、富士山がとても綺麗に見えたんです。・略・」と、川崎市の「やまがある」から、祝福のメッセージが届けられた。

富士登山、その最終章!??

「ワガツマ」の一大事??… 山小屋に残った「ワガツマ」は、「いつ戻るのか」と外に出ては山頂を見上げていたようだ。そして「腰が痛くてあまり動けない」と言う。山小屋のスタッフから湿布薬を貰い応急手当をした。明日の朝まで回復するのか?。「花小屋」の下までの岩場をどう下るか?。「ワガツマ」の一大事である。

その時、カメラがなかった。
…夕暮れの「天空の宿」にて…

確かに「影富士」が…。時すでに遅し!!…

「御来光!?!」そのラストチャンス??

その夜は祝杯を酌み交わして、早々に就寝した。翌朝、果たして「御来光」は見られるのか?。そのラストチャンスである。Am4:00 頃に外に出て、眼下の街明かりと天空の様子を窺う。富士吉田の街明かりは確認できるが、周囲は暗くてよく解らない。Am4:30。周りの様子が見えてきた。

他の登山者も山小屋の周囲に集まってくる。東の空が紅く染め上がってきた。富士吉田の街並と雲海の固まりが確認できる。でも、濃霧が湧いてくる気配はなさそう。Am5:00 を過ぎると山小屋の前が混雑して来た。ガア、物音ひとつしない。静寂な時間と空気が流れた。「ワガツマ」も腰の痛さを押してテラスに立っている。富士山頂に登るだけでも夢だったのに、「富士山で御来光」が見られるなど、夢のまた夢物語である。そして富士登山の最終章は「劇的な御来光との遭遇」となった。



アカツキの空に、御来光を待つと??…



ついに、御来光とのご対面です!!…



しだいに、神々しさが増してきて!??



見つめる者を、感動の渦に巻き込む!!!…

七合目から五合目へ 下山 !!...

岩場をどう下るか??...

初めての富士山登山にして、初めて富士山での御来光を拝顔した。その余韻に浸りながら下山のために身支度を調える。腰を屈められない「ワガツマ」に替わって、登山靴の靴紐をガッチリと結びつける。問題は「花小屋」の下までの岩場をどう下るかである。そんな不安を察したのか、「トモエ館」のスタッフが「その状態で岩場を下るのは、大変でしょう。ブルトザ道を下ればいい。小屋の下で登山道と合流するから。」とのアドバイスをくれた。その言葉に従い、Am5:40 に山小屋の左手のバリケードを開けて、「ブル道」に入った。厚い砂礫の道で腰や膝への衝撃がかなり吸収される。そんな私達一行を、登山道の人達が怪訝な顔をして眺めていた。やがて「花小屋」から大分下った処で登山道に合流した。もう岩場はない。



六合目、ツツラ坂の最下部へ...

七合目から早朝に下山する登山者はほとんど見

あたらなかった。「ワガツマ」も腰の痛さに耐え、ゆっくりと下山している。登山道に合流してからは砂礫のツツラ坂を、慎重に、ゆったりと下り続ける。やがて Am6:25 に六合目に到着した。

一昨日の山頂への急登は、ここのツツラ坂のから始まった。深い濃霧で何も見えない中を、黙々と歩いた道である。それが今、紺碧の青空のもと天空まで続く登山道が丸見えである。そんな視界良好なツツラ坂の最下部に立って、過ぎきし登山道を振り返って見上げた。

登山行程も最終盤になった。「大変だったア!?'という気持ちはなかった。「富士山頂に登れる」その気持ちのほうが勝っていたのだろう。改めてツツラ坂の急坂を見上げた。六合目からの下山道は、吉田口と河口湖口に分岐する。私達が下山する河口湖口へは、標準タイムで 40 分である。



懐かしい、樹林帯との再会 !?..

振返って富士吉田方面に視界を転ずると、濃緑の樹林帯が一面に広がっている。その木の葉の爽やかな匂いを涼風が運んでくる。

思い返せば富士山頂では生命の証である「緑」の色は無かった。高山植物でさえ、その生命の生存が叶わない現世と乖離した別世界であった。

泉ヶ滝への樹木の下を歩く道すがら、太陽越しに目に飛び込む緑の色彩に「ホッ」とした安堵感を覚えた。私達の「日常生活圏」に戻ったのだ。



五合目、登山基地に帰還 !!..

登山者のまばらな道を下り「泉ヶ滝」に着いた。ここからは、緩やかな最後の「登り坂」になる。下山するほど、気圧が日常レベルに回復してくる。その分、踏み出す足腰に踏ん張りが効くような感じもする。涼風と登山靴の音だけが聞こえていたが、しだいに騒々しい音が耳に響いてきた。その音に誘われて歩くこと数分、ついに河口湖口五合目の登山口に到着した。時刻は Am7:00。一昨日の入山から 44 時間を費やし、とうとう私達の「夢の実現」であった「富士山登頂」を達成し、無事に元の登山基地に帰還したのである。両手を高々と上げ、満面の笑みで健闘を讃え合った。



さらば富士山、さらば登山基地!!

五合目河口湖口の「登山基地」は、今日も富士山頂を目指す登山者が動き回っている。その間を縫って駐車場に移動し、車の後でザックを肩から下ろした。快い充実感が全身に広がる。

一昨日の入山時の天候とは一変し、富士山頂の全容が見て取れる。天気にも恵まれ、色んな姿を見せてくれた富士山。初めてにして御来光まで見られた。それは、山形からの長い道のりを迎ってきた、私達への富士山からの贈り物に違いない。



改めて 富士登山を想う !?・・・

課題を克服 !?・ 「日本一高い富士山は一番最後に登ろう」それは、筆者が20代の頃に故里「東北」の山を中心に登っていた頃の想い、である。それを大和工営一等三角点の会「富士登山遠征隊」として企画して、実現する事が出来た。業務の多忙極まりない日々の中で「貴重な時間と費用」を捻出し参加した方々、又それを快く送り出してくれた会社、職場の方々に感謝したい。

「いそがしい」について 私は『忙しい』という言葉に替えて「時間が足りない」と言うように心掛けている。「忙」の漢字は「心を亡くす」と分解できる。

また「忙しい」という言葉は、やるべき課題が出来なかった時の弁明になる側面もある。「忙しい」と言えば「すべてが許される？」免罪符になることも多い。「時間が足りない。」だから、**限られた「時間」の使い方を考えて行動する。そう、ありたいものと心掛けているのだ。がァ・・・**

高山病と体調は 日常生活と比べ、空気の薄さが2/3の世界など、今までの人生で一度も経験したことがない。入山前に五合目で2時間程過ごし、**高度順応**を試みた。時間的にもユックリと登った。七合目に二泊した事で？体調はすこぶる良好で、時間的にも余裕が出来た。そのお陰で「お鉢巡り」もでき、日常生活では体験出来ない素晴らしい数々の光景に接する事が出来た。

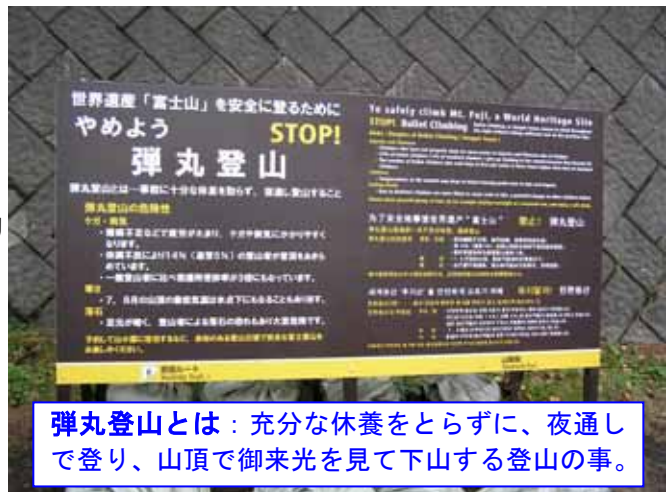
山小屋の温かさ・・・ 今回お世話になった山小屋は2泊とも「七合目トモ工館」である。7/26に「富士山は初めて登るんですけど・・・」と言って宿泊の予約をした。その最後に「暖かい格好で来て下さい。」と言ってくれた。その言葉に温もりを感じた。山小屋の2泊目の夕食のメニュー替えてくれたり、腰が痛くて大変な思いの「ワガツマ」が「湿布薬」を頂いたりした。加えて山小屋を出発する時には、腰の負担を軽減するため岩場の道を避け、ブルドーザ道を下るようアドバイスを頂いた。全てに感謝の限りである。「ワガツマ」は「私、今度来た時もあの山小屋に泊まるヨ!!」と言っていた。その「ワガツマ」も車に戻って「痛み止め薬」を飲んだ後は「ケロツ」としていた。

真夏の夢??・・・ あれからもう4ヶ月が経過する。**私達の富士登山は、ある意味においては「真夏の夢」だったかも知れない。あの気象条件下での富士登山は「あり得ない」と今も想っている。**まるで「百獣の王」が眠る檻の中を静かに、静かに歩き廻ったような感覚である。山には「登り坂」と「下り坂」ともうひとつある。一旦、山が荒れたら、命を落とす事もある「まさか」である。山登りは登頂を目指す以上に、状況によっては即時撤退(下山)する勇気と判断が必要である。

富士登山の費用はおいくら?? (共同費用)

支出合計 ¥157,594

- ・ 高速料金 (夜間+昼間) ¥41,050
 - 東北道 A車 14,700 B車 9,950
 - 圏央、中央道 7,250 5,150
 - スバルライン 2,000 2,000
 - ・ 燃料 (ガソリン) 104,89ℓ ¥16,474
 - A車 53,08ℓ 8,215 / B車 51,81ℓ 8,259
 - ・ 宿泊 (個室+¥1,000) ¥85,000
 - 一泊二食付 (5名×2泊×@8,500)
 - ・ エネルギー源 ¥9,050
 - 缶ビール 350ml (13本×@600) 7,800
 - 日本酒 1.8ℓ 1,250
 - ・ 登頂証明書 (4名×@100) ¥400
 - ・ おみやげ ¥2,120
 - ・ 日帰り温泉 (5名×@700) ¥3,500
- 会費 (5名×@30,000) ¥150,000
※一人あたり¥31,519 (不足分は別途精算)



弾丸登山とは：十分な休養をとらずに、夜通しで登り、山頂で御来光を見て下山する登山の事。